

## はじめてのアメリカ・メキシコの旅(上)

周 郷 博

# H

昨年の十一月二十四日から暮れの十二月十四日まで、ごく短い期間だったが、私ははじめてアメリカ——そこから足を伸ばしてメキシコの旅をして帰ってきた。

アメリカとラテン・アメリカ諸国は、一九四五年の敗戦後まったく急に日本と「新しい」「近しい」関係にはいった地域であるのに、私はアメリカへ行ってみたいなどと思っただけでもなく過してきた。メキシコや南米（ブラジルやチリ）は「遙かな国、遠い国」のまま、そこまで行ってみるなどということは考え及ばなかった。小学校の五年生のとき、ブラジル移民を「まじめく

さって」考えたり、十三、四歳のころ、アメリカへ渡ってみたくて横浜の岸壁に一人で座って小半日海の彼方への憧れを少年の胸に燃やした日もあったが、それも「遙かな昔、遠い昔」。ブラジルにいる二十数年前の教え子がときどき帰ってきて向うの話を親身に話してくれたり、最近の幼教の卒業生田村さんと子にメキシコからチリへ行ってガブリエラ・ミストラルの墓を訪ねたりしてきた話を聞かされても、メキシコや南米は遠い存在——そんな中南米の開発途上国の苦境Ⅱ問題を（教育

▲ルイスさんと筆者



とからめて)ぼんやりとながら実感しはじめたのはイワン・イリ  
イツの本を読んでからのことにすぎない。

アメリカ——は、日本の敗戦、長期にわたる占領によってヘン  
なかたちで「近過ぎる!」。「表面的なアメリカ化」はもうたくさ  
んだ、という旋毛曲(つむじま)がり(が)が心根にあつて、イギリスやヨーロッパ  
の方から見るのが着実、という気がして、ヨーロッパのほうへ目  
を向けることが多かった。敗戦八年目の夏、「偶然な運命から(中  
国から航空切符が来た)」「ウィーンの「世界教育者会議」という集  
まりに「参加」出席したのを始めとして、その後ロンドンの「人  
類の未来のためのテイヤール・センター」の会員になったことも  
あつて、四回もヨーロッパへは行つた。最近は、とくに六〇年代  
末(附属幼稚園長を兼ねたころ)からは、それと併せて「中国か  
らの視点」というものの重要度をつよく感じている。ともかく、  
エゴと無感覚の退廃のひどい「島国根性」(井戸の中の「みにく  
い蛙」)の心境から脱けだして、ひろい世界の「流れ」の中にわ  
が身(とこの祖国)を置いてみることはなしには、人生の問題も教  
育の問題もほんとうにわかることはない(というのが私の切なる  
本心なのだ)。

昨年(の)春、カナダの西部へいくチャンスがあつて(それを私は  
断つたが)、そのことからルイスさんが二十五年前の「FEB」(幼

児教育の指導者養成)の受講生(年をとつた「教え子」)たちが  
ルイスさんを訪ねてくれるといいと楽しみにしている気持ちをル  
イスさんの手紙から私は感じとつていた。そのチャンスを外(はず)  
し行けなかつたから、私はいつそうルイスさんの心を感じて「アメ  
リカへ行つてこよう」という気持ち(が)が動いていた。しかし、なん  
といつてもアメリカの「ベトナムからの敗退」——これが私をア  
メリカの旅に誘つた何よりの誘因。「強いアメリカ(力の信者で  
あるアメリカ)」には反発したが「敗けて名譽を持ち直そうとし  
ているアメリカ」には深い共感を(勝手に)感じる。私は百年前  
のアメリカ、フォスターやホイットマンのアメリカが好きだ。  
「大草原の小さな家」に描かれているアメリカ。ジョン・パエ  
ズの反戦の歌やジョン・デンバーの「Sweet Surrender」に通じ  
る、「ベトナム戦争に見ると全くちがう」また「アメリカ化し  
た日本」とも全然ちがう、心底からのヒューマニズム——「よき  
素朴なアメリカ」に出会えるかもしれない。一七七六年のアメリカ  
カ独立(建国)から二〇〇年——ちよどよい「反省」の時機と  
して回つてきている。

メキシコのほうは、一九七二年からおよそ一年、私のお茶の水  
女子大に「留学」していたマリヤさんにたびたびせがまれていて  
「行つてあげたい」と思つていた。ちよどよい機会にめぐまれ

た、というわけだが、国際婦人年のころ、黒沼ユリ子さんの書いたものを読んだり、そのまゝに鶴見俊輔がユリ子さんのご主人リカルドーさんのことなどといっしょにメキシコ滞在中に考えた愉快な文章を読んでいて、漠然とながらメキシコという国を肌で知りたいという気持ちがあった。然し、何よりメキシコへ行くことで私の心にあつたのは、「イリイッチ・ショック」ということで知られる、世界の教育改革（大動乱）の「予言者」のような位置にいる、あのウィーン生まれの元僧職者イワン・イリイッチにひよつとしたら会えるかもしれない、ということがあつた。黒沼さんも、荒唐のひどいインディオの部落で、夫のリカルドーさんとやつている。「部落の自立のための」しごとの中で、モンテッソーリの教育方式で部落の子どもたちの教育をしているという、そこへ連れていって見せたい、という好意を、毎日新聞の安東美佐子さんを通じて知らされていた。

### はじめてのアメリカ

個人の公式の旅費六十四万円ということもあつて、旅行会社が目算した参加者十五人には達せず、参加者わずか八名ということになり、当初予定したメキシコ行きは切つて、アメリカだけの十四日間の旅ということに落ちついた。「倦み」疲れて「悲惨」(Dy-

derived misery) ということばでしかいえない、現在の「教育」と日常生活(Ⅱ人生)にくらべて、二十五年まえの日本は、貧しく、傷心、欠乏の時代ではあつたが、「そこへ」どんな詩をかくかは人間の決意次第だつた。まだ全く「白紙の状態」であつたころ——ルイスさんを中心に集まつた人たちの「初心」を思えば、もつと集まつてもよかつたのにと悔まれたが、八名というのは手ころで、そこへコスモポリタンの玉生嶺里君と私がいって一行十名でかけた。

十二月二十四日の夜羽田を発つて、ハワイ経由でその同じ日の十時に(時差による)ロスアンジェルズについたが、翌日二十五の月曜日は、疲れ休めに午前中、空港ホテルのマリオットでぶらぶらして、午後は市内見物——ハリウッドの俳優たちの住むサンセット・ヒルなどをバスで案内してもらつて、日の暮れまで市場を見たりして歩いた。はじめてのアメリカの旅の第一日だが、そのバスに私たちといっしょに乗つていた一人の若い女性の眼差しが私にはまず印象に残つた。降りたり、また乗つたりする度にごとに、何か、さびしい、悲しい眼差しでにっこり会釈をする。まわりの人と話しているのを聞いていると、高校を卒業したのだけけれど、ただ一人でこんな旅をしているのだと言う。ヒッピーではないけれど、アメリカの若い人の心が感じられるようで「話してみ

たい」気持ちがあった——カリフォルニアの北のほうの奥できびしいコミュニケーションの生活をしているアリソア・ローレルという人（「地球の上に生きる」という変わった本を書いている）も、この人から想像したりした。日がとっぷり暮れてから、またおなじバスに乗りこんできたが、一人でさびしそうに降りていった。ともかく、日本の若者たちとは何かちがう、アメリカの大きな変化に「耐えている」ものの表情を見た感じがした。市場——というのも、またなんという「気楽」な、解放的なところか！ 果物屋のおやじさんも日本人と違って愉快に話しかけてくるし、コーヒーは一回飲めばあとは何杯でもただだし、バスの運転手などもそこへ二、三人集まってくつたくな話に興じていた。失業者が多いといったって、土地は広いし、何かに「追い立てられて」いらしているところなどはないのが、私は羨しかった。いまの日本とは大違いの、田舎くさくゆったりした、こせこせしないアメリカを見た気がしたのは私の思い過したっだろうか。

その日の夜の十時、ロスアンジェルス空港をとり立って南のフェニックスという町に十二時ごろ着き、そこから夜間飛行でワシントン郊外のダレス空港に夜明けに着いた。夜間の移動が重なって疲れてはいたが、東部の冬の始めの草原と林の広々とした道を空港から一時間たっぶりバスで走って眺める風景は、せせこま

しい日本とちがって心が生き返る思いがした。

ホテルにはいって、午前中は黒人が八割を占める、ある住宅街はガラシとして、空家同然のかつての白人たちの「立派な」邸宅に、壊れちらかったままで黒い人がぼつぼくと住んでいる町を見てもまった。アーリントン墓地、衛兵の交代、ポトマック川、ウォーターゲート……フォード大統領が近くの教会へ来るというので出かけていった人たちもいるが、私はホテルでぼんやり考えごとをしていた——アメリカの民主主義が想像もできない大変化の渦中にあるのだということをよく理解してみた——。「動いているアメリカ」。これにくらべて、日本は、敗戦後数年のあいだに「できた」ものがたたいよいよ身動きのできない固まりかたをしているだけ（誰が、何がそうするのか？）。四、五年前にアメリカの議員を交えた調査団が日本の教育の調査にきて、「アメリカの教育はその後大へんな変りかたをしてきたのに、日本の教育は占領時代のままで、教育の意味を考え直すことなどせず、それをへ上から（文部省が）統制で締めることしかしていない。これは日本の子どもたちの未来を暗くしている」と報告書に書いていた。「誰かを愛するということは、彼らに成長の余地を与えることだ（To love someone is to give them room to grow）」と、どこかの学校の教室の壁に書いて貼ってあるのをその後見たが、

日本にはその「余地」も「愛」もなく冷えきっているとしか思えない。

その日の午後は、ルイスさんが紹介してよこした「幼年教育協会インターナショナル」のミス・アルベルタ・マイヤーさんを訪ねることで過したのだが、長距離の「旅の疲れ」で、私も通訳の玉生も頭の働きがわるく先方に失礼を重ねるばかり——せい高のつぼの、係の若いお嬢さんから「あなたの気持ちよくわかります」などと慰められたが、この静かな建物の中の三人の「人のよさ」は、日本にはない。あの亡くなった絵本作家バージニャ・バートンに通じるような、「澄んだ理想主義者」の集まりという感じだった。そこで「セサミ・ストリート」は「知識に片よっていて」賛成がたい、と聞いたのも、日本でもてはやすのと違っていて、納得できた。アメリカの幼児教育の最近の移り変わりについて要を得た印刷物をいくつかもらったが、このことは後で、まとめて書くことにする。

ニューヨークへ着いたのは土曜日。この大都会には、世界中のいろいろな人が集まり、いろいろな考えの人が集まっているのだが、次の日も日曜なので自由行動に任せるしかない。町の通りにたむろしているアル中の人たちの空ろな目、町角で物売りをしているプルトリコ人……セントラル・パークの向うは危険だとも

聞かされて、私は本屋をぶらついたり、ホテルでぼんやりしていた。

ニューヨークで、私は私だけのしごとを二つもっていた。一つは、一九五五年の四月十日にここで突然昇天したテイヤール・ド・シャルダンの墓を訪ねることだった。私は前日の晩、その四月十日のミサにテイヤールが出たという、セント・パトリックスというカテドラルのミサに出た。そこでテイヤールの墓の所在を訊ねたがどうもはっきりしない。ミサのあと隣同志で握手をして「平和の誓い」のようなことをして帰ってきたが、テイヤールの墓は、日本でしらべて行った、ハドソン川を五〇マイル溯ったセント・アンドリウスという教会の墓地を、車で自分で探すことにした。しかし、日が暮れてしまってセント・アンドリウスには辿りつけず、ワシントン・アーヴィングの昔の住居、サンニー・ヒルを案内してもらって、暮れぐれの帰途、田舎風の店で、同行の女性二人とコーヒーを飲んで引きあげてきた。

もう一つは、ニューヨーク市立大学の教授、ドクター・アーノルド・ローズさんから ICIS (International Center for the Integrative Studies) の短い原稿を依頼されていて、その打ち合せみたいにして会う筈にしていた。この ICIS のメンバーに日本から私とジャン・フリッシュュさんがえらばれている。それも土曜、

日曜で（すぐ近くの五番街が事務所なのに）、早々にハートフォードへ飛び立ってしまった。ニューヨークの下町のようなところの私立の ABC Child Care-Nursery School and Kindergarten という所へみんなで訪ねたが、これも後でまとめて書く。

## アマースト

ハートフォードの空港を出たら、イギリス風の品のいい老運転手が中型バスを用意して待っていてくれた。それに私たち十人が乗りこんで、ロングメドウ、スプリングフィールド（ここから右へ折れる大通りはポストンへ行く）、ホリオークなどというイギリス風な名前の町を通って、いかにもニューイングランドらしい風景の中を一時間半ほど走り、正午前に、ニューイングランドの大学町アマーストの、町はずれの小さなホテル（Motor Lodge）のところどとまった。バスから、道路傍の草原に四人の女性が立って待っているのが見えた。近づくると一人はルイスさん、それからタットマンさん、それに、なんの連絡もできないでいたのに、昔の下牧さん（いまは英子・ウェイマンさん）がきていた。もう一人は、タットマンさんの姪の若いヘレン・カーティスさんだった。バスがとまるのを待ちかねて、かけ降りて私たちは抱きかかえるように互いに「再会」をよろこび合った。ホテルの田舎風の

ロビーに落ちついて、私たちはタイプに打ったアマーストのスケジュール（予定表——次頁参照——）を渡された。一人一人胸に名前をつけて（先方も）滞在中の予定を楽しいユーモアを入り交えて説明をきいたあと、一時半に迎えにくると言って四人は帰り、私たちはホテルで昼食をした。

一時半には、三台の車で迎えにきてくれて（社会学のウィルキンソンさんや他も交って）アマーストの五つの大学、マサチューセッツ、スマイス、マウンツ・ホリオーク、アマースト各大学を見せてもらい、三時から四時、早目のディナーに呼ばれた。ちょうど、この地に由緒ふかい「感謝祭」で、大学も店も休日だったのに、若いお嬢さんに来てもらって、ローソクを灯した、古風なリングづくりの宿（Inn）の一室の長テーブルをかこんで、七面鳥の料理をいただいて歓談した。その情景は忘れがたい。底なしの人のよき、厚意、友情、知性のこぼれるユーモア……はるばる海を渡って大陸の東北部のここまできて、こんな心が生き返る友情に迎えられて、私たちは「来てよかった！」と誰もが（物語りにあるような）「故里へかえった」<sup>ホーム</sup> 思いを味わった。その日は「眠りをとりもどす」ために早目にホテルに帰してもらったのだが、帰りぎわに、そのディナーに呼ばれた「E」のすぐ傍に、これはその昔、札幌農業学校に來たウィリアム・クラークが、その頃日

本から持って帰ったという桂の木が、天を指すように枝をはたつてどっしりと立っており、その幹に「桂」と漢字で夜目にもわかるように書いてあるのが目にとまった。

翌日の月曜は、午前も午後も「予定表」にあるように幼稚園や実際の見学、研修（これも、まとめて後に書く）で、その晩は七時半から、ルイスさん、タットマンさん、ヘレンさん三人が住んでいる家で「お茶とデザートのみ集まり」があり、マサチューセッツ大学の幼児教育の教授デーヴィッド・デイさん（北海道大学で講義をしたことがある）が話をしてくれた。

——ところで、三日目の午前中はたっぶり「空いている」ことを知って、ルイスさんはその「計画」を相談したのだろう、急にタットマンさんの農場へ私たちを連れていってくれることになった。二台の車に分乗して、アマーストから一時間あまり、コンウェイというところから右に折れて、ほんとうにアメリカの牧歌的な田園風景の中のタットマンさんの農場を訪ねた。そのあたりにはタットマン家だけ、といった広々とした草原と原始林の中のタットマンさんの農家で、私がどんなに「慰められ」くつろいで心地をとりもどしたか。帰るとき、ルイスさんが「あなたはここに残ったほうがいい」と私に冗談を言ったくらい。清潔な牛舎、あの仔牛、ずっと遠くから私たちを見ていて、帰るとき途中まで

### Sunday

Greeting at Howard Johnson Motel

Rest until 1:30 P.M.

Tour the Five Colleges in and near Amherst -- University of Mass.

Smith, Mount Holyoke, Hampshire, and Amherst Colleges(1:30-3:00 P.M.)

Dinner at the Lord Jeffery Inn, a typical New England Inn(3:00 - 4:00 P.M.)

Howard Johnson Motel, with chance to "catch up on sleep".

### Monday

Breakfast, Howard Johnson Motel

A day of school visiting:

9:30 - 11:15 A.M. Kindergartens in the Wildwood School

Principal: Miss Nancy Morrison

Lunch, Howard Johnson Motel

12:30 - 2:45 P.M. Kindergartens in Marks Meadow School

Principal: Mr. Michael L. Greenebaum

Free until 7:30 P.M.

Dinner at Howard Johnson Motel

7:30 P.M. Dessert, with tea or coffee, at the home of Jean Lewis, Ruth Totman, and Helen Curtis

8:15 P.M. Talk by Dr. David Day, Professor of Early Childhood Education, University of Massachusetts.

---

Guest translator: Mrs. Alex Wayman, formerly Hideko Shimomaki of Japan

ついて来て、そこで見送っていた犬……牛でも犬でも、日本とはちがって「親しみ」と何かの気品をもっている。「あわてて」いない。「考えながら」支え合っている生命のいとなみ。道の途中の林のへりに薪でも蔵たくわっておく小屋のようなものがあつたが、タットマンさんたちが子どもころ通つた学校だ、とタットマンさんが言った。そんなアメリカの素朴なものに出会つたのは私はいれしかった。日本の「アメリカ化」の醜さも思い併せると私は口惜しかった。

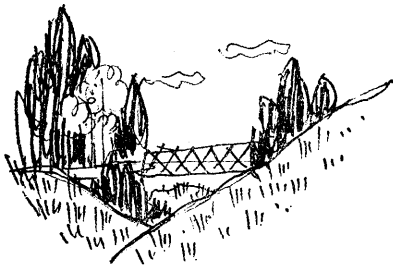
思えば、ルイスさんが（占領軍の「計画」に割り込んで）日本へ来てくれたのは、敗戦後四、五年たつたばかりの頃、——あれから二十五年（四分の一世紀）という年月が流れ去つた。

年月が「流れ去つた」と、偶然こう書いて——だが、それからしばらくして、六〇年代を頂点にしての技術革新、経済大国一逼倒の暴走で、「流れがとまったもの」のあるのに私はハッと気づかされた。「年月が流れ去つた」ら、「春がめぐってくる」とか、「友情が芽生えてくる」とかいうものなのに、その十五年あまりの間に、汚染物が（雑多な知識もふくめて）溜たまるばかり。人の心の「流れ」さえも、「流れがわるく」なり深い共感が失われて「体温の低下」がひどい。年月というものが、この日本と私たち日本人の心にいったい「流れ」ているのか。「流れ（歴史の流れ）」がそ

の神秘を見せてくれているのだろうか。

アマーストの三日間は、アメリカの旅で学んだすべてを集約する「意味のふかい」三日間だつた。戦後三十年の激しい変化を生きてきて、二十五年を隔てての「邂逅（出会い）」の中で、私たちは何やら「道しるべ」になるものと遭遇した思いがあつた。その感懐を短い英文に記し（あとで帰国後日本語ですこし長くまとめた——次頁参照——）そこへ「記念」にみんながサインした。それを、昔のIETFの受講生たちに送り、アメリカへも送つた。

（以下次号に続く）





私たちはとうとうアマーストまでやってきてルイスさんと落ちあった。ルイスさんと彼女をとりまく愉快で気持ちのよい友人たちが、由緒ある静かな東部ニューイングランドのこの大学町とその自然＝風景とともに、私たち日本からの訪問者を快くその懐ろに迎え入れてくれた。

「夢のような」3日間だった。秋の終りのアマーストでの、日本では想像もできないこの親愛と友情の出合いの「よろこび」を、25年前の日本でのルイスさんの幼児教育 IFEL に集まった昔の学生たちに知らせ分ちあって、いっしょに幼児教育の道筋を求める初心とさわやかな知性をもち直すすがにしたいと、私は願わずにいられない。

およそ100年前、このアマーストの大学のW・クラークが札幌農学校へやってきて明治初期の日本の精神的目ざめに大きな灯りと導きになったことが思いあわされる。そうして25年前、敗戦直後の欠乏と傷心の私たちをルイスさんはその不思議な魅力＝引力を持った人柄とヒューマニティーを持って勇気づけ、幼児教育をつうじて人生の(人間の)道を教えてくれた。私たち日本の、二つの歴史的瞬間においてのアマーストと日本との因縁に何か建設的な意味が感じとれる思い——ルイスさんは忘れがたい人だった。

25年前のルイスさんに挨拶と感謝をのべるためにアメリカに行く——そんな漠然とした気持ちがあつてにわかにアメリカ旅行となったのだが、アマーストへきて、ほんとうに生きているもののいのちと愛＝友情が枯れることのないことを深く思い知らされた。100年前の「少年よ大志をもて」は、いまこの私たちにとってどんなことばとして「生まれかわる」べきなのだろうか。1952年の初夏、ルイスさんは私たちに「あなたのよき仕事に勇気をもて *Courage to your good work*」と、アメリカから私宛に電報を送ってくれた。変転激しい歴史の流れの中で、その「よき仕事」の実を私たちはほんとうにつかみたい。

Dec. 2nd. 1975 Amherst, Hiroshi Sugō